

小説で医学史

著名な医家を主人公にした歴史小説を読むと日本医学史の世界に入っていくことができる。直ぐに思い浮かぶところでは、有吉佐和子『華岡青洲の妻』（1966 新潮社 のち新潮文庫）がある。

吉村昭の小説にも医家を主人公にした小説がある。『日本医家伝』（1971 講談社 のち講談社文庫）は山脇東洋や前野良沢等 12 人の医家を主人公にした短編小説集である。『ふおん・しいほととの娘』（1978 毎日新聞社 のち新潮文庫）はシーボルトの娘・楠本いねを主人公にしている。『冬の鷹』（1974 毎日新聞社 のち新潮文庫）は『解体新書』翻訳に携わった前野良沢を主人公にした作品で杉田玄白や大槻玄沢らの医家が登場する。東京慈恵会医科大学の創立者で脚気の原因を探求した高木兼寛を主人公にした作品は『白い航跡』（1991 講談社 のち講談社文庫）である。日本への種痘の導入に関しても吉村昭は複数の作品で取り上げている。『花渡る海』（1985 中央公論社 のち中公文庫）の主人公である船乗り・久蔵は船が難破しシベリアに漂着、ロシア人医師から種痘について教えられ痘苗を 1813(文化 10)年日本に持ち帰るが役人は種痘を全く理解せず久蔵の努力は無に終わってしまう。『北天の星』（1976 講談社 のち講談社文庫）の主人公・中川五郎治は択捉島で番人小頭をしていた。五郎治は 1807(文化 4)年、ロシア人の襲撃にあい、シベリアに連行されるが、その後日本に帰還。シベリアで種痘を知った五郎治は 1810(文化 7)年、松前藩で種痘を施し成功。だが五郎治は種痘を秘術としたため北海道の一部地域のみでなされただけで終わる。福井藩の町医・笠原良策が榊林宗建の種痘成功の報に接し、笠原が福井の地に種痘を普及させる努力を描く作品が『雪の花』（1988 新潮文庫）である。なお吉村昭の作品『光る壁画』（1981 新潮社 のち新潮文庫）は歴史小説ではないが胃カメラの開発の経緯をモデルにした興味深い小説である。

最近の医学史上の偉人を主人公にした作品では植松三十里『千の命』（2006 講談社）がある。彦根に生まれた著名な産科医・賀川玄悦の生涯を描く。山脇東洋や吉益東洞も登場する。

緒方港庵については司馬遼太郎著『二十一世紀に生きる君たちへ』（2001 世界文化社）に掲載されている『洪庵のたいまつ』があるというが筆者は未見である。

小説ではないが森銑三著、小出昌洋編『新編おらんだ正月』（2003 岩波文庫）は江戸時代の著名な学者についての平易な伝記集で医家も多数取り上げられている。

なお筆者が知らない作品も多数あると思う。ご教示いただければ幸いです。 (菅 修一)